

---

# 妖と夜叉 番外編

霜月サヤ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖と夜叉 番外編

### 【Nコード】

N8069Y

### 【作者名】

霜月サヤ

### 【あらすじ】

連載『妖と夜叉』の番外編集です。

## はじめに

はじめに

こちらは『妖と夜叉』の番外編集となっております。  
ヒロインの詳しい設定は、本編の方をご覧ください。

簡単にヒロイン設定を紹介

ヒロイン（奴良リオ）は、リクオの双子の姉です。

また、番外編は思いついた順に書いていくため、時期がバラバラとなります。

1話ごと完結となるため、読むには支障はないと思います。

番外編では、キャラ崩壊が目立ちます。

その辺はご了承ください。

それでは、番外編集は次話よりです。

本編『妖と夜叉』もよろしく願います。

混合ゆえに起こること（前書き）

声優ネタです

## 混合ゆえに起こること

奴良家にて世話になっている坂田銀時。  
そんなある日のこと。

混合ゆえに起きること

なんやかんやで銀時の話し相手は、リクオとリオだった。

「義兄弟？」

「そうなんだよ。今日、義兄弟の鳩<sup>ぜん</sup>くんが来るんだ」

「鳩の兄貴は、結構アレだもんね」

「ボクが三代目継がないって言っていた頃と比べればマシだよ……」

「そういえば坂田さんの声って、どこことなく兄貴の声に似ているよ  
うな……」

「あ…確かに…似ているかも」

「?どんな奴?」

この家のことを聞いていたが、義兄弟であるという“鳩”の話が出た。

「ん、病弱な妖怪」

「なのに、熱血なんだよね」

と、その時、周りの者どもが騒ぎだした。

「あ、鳩くん来たみたい」

「坂田さん、会ってみる?」

「ん。暇だしな」

その鳩とやらに会ってみることにした。

「兄貴、おひさ〜!」

「おお、リオか。見ねえうちに、またキレイになったな」

「やだあ、冗談よしい」

「リオ、鳩くん。そこまでにしなよ」

「……………」

似ているも何も、同じじゃねえかアアアアアア！

「ん？リクオ、誰だ？」

「坂田銀時さん。昨日から本家で預かってんだよ」

「なーんか、訳ありみたいな感じだよ」

「鳩だ。よろしくな」

「あ、坂田銀時です」

「……………」

俺と同じ反応じゃねえか、コノヤロー。

「あ、考えたら、同じ杉 智 じゃなかった？」

「あゝ確か、そうだったような……」

「同じ 田 和じゃ、仕方ないよね」

「ちょッ！リオー！伏せ字の位置が違うから！伏せ字の意味をなさなくなるから！！」

混合ゆえに起きること。

それは、同じ声を持つ者が会おう可能性があるってことだ。

「と、とりあえず、よろしくな」

首のないイケメンさん（前書き）

タイトル通りのキャラが出ます

## 首のないイケメンさん

奴良家でお世話になることは必然的に、本家の妖怪と出会うというもの。

とりあえず、挨拶をすることに。

首のないイケメンさん

「とりあえず首無から会おうか」

リオがそう言った。

「首無？」

「うん、まあ見た目も名前通りなんだけど、すっごくイケメンだよ」

「イケメンって何だ？」

「あー、イケてるメンツの略なんだけど…要するに顔が整ってるってこと」

「ふーん」

「あ、でも坂田さん平気かな？」

「だ、大丈夫だって」

「じゃあ行こうか」

リオは立ち上がり、首無のところに行く。それに銀時は続いて歩いた。

「やつほー首無」

「リオ様？どうなさいました？」

「うん、ちょっとね」

「ああ、そちらの方のことですか？」

「まあ、そうなんだけどさ。坂田さん、この人が首無。んで、この人が…」

「坂田銀時だ」

「坂田殿ですか。私は首無です」

「リオから聞いたけど、マジで首ねえの？」

「ええ。なので、こうしてマフラーをし、首がないことを隠してます」

「ちなみに名古屋まで首が飛ぶ」

「ははは」

「名古屋ってどこ？」

「えーと…ねえ首無」

銀時がこの時代の人間でないことを思い出したリオは、首無に聞いた。

「はい？」

「江戸時代だと名古屋は何？」

「江戸時代ですか…確か、尾張ですね」

「尾張か。それじゃあ、相当だな」

「大変でしたよ」

「まあそういうことで、首無よろしくね」

「わかりました」

区切りがよかったので、首無と別れた。

「坂田さん、首無は怒らせない方がいいからね」

「何でだ？」

「言っじゃないですか。普段穏やかな人程、怒ると恐いって」

「あーそうだな」

「リオ様、聞こえていますよ」

「う…げ…（地獄耳…）」

「別れて間もないのに、言うからですよ。それでは聞こえて当たり前です」

「すみませんでしたー！！」

「（なんか、首無って奴には、あんまし接触しねエことだな…）」

首無とリオのやり取りを見ると、確かに“穏やかな人程怒ると恐い”というのは正しいと思えた銀時であった。

氷には気を付けよう（前書き）

タイトルでお分かりの方です

氷には気を付けよう

「奴良家でのご飯、カチカチになっ たご飯なんだよね」

「はあ？」

リオの言葉に疑問を感じる銀時であった。

氷には気を付けよう

「どういうことだよ」

「あ、そういえばまだ氷麗ちゃんには会っていないよね」

「氷麗？誰だ？」

「雪女の妖怪だよ。氷麗ちゃんが、ご飯を作ったり、運んだりしているから、ご飯が氷付けになるんだよ」

「それで、さっきの言葉になるわけなんだな」

「そういうこと」

氷麗ちゃんに会おうかって言葉を続けた。

「いちいち会わねえといけねえの？」

「そんなことないよ。会いに行こうって言っているのは、みんなリクオと盃を交わしたメンバーだけだよ」

「ふーん。で、その雪女もか」

「うん。あ、氷麗ちゃん」

前方の方には、洗濯物を運んで干している氷麗の姿があった。

「リオ様！どうなさいました？というより、そちらの方は？」

「えっとね…「坂田銀時だ」…です」

「…………ま、ま、まさか！？り、り、リオ様の…」

「違うから！！」

氷麗が言おうとした言葉を遮り、否定するリオ。

「そうですか」

「そうなの。しばらく厄介になる坂田さんだよ」

「ご挨拶遅れました。私は雪女の氷麗です」

「改めて、俺は坂田銀時だ」

「それじゃ、氷麗ちゃんに会ったし、次行こう！」

リオは銀時を引っ張り、次の人を会いに行った。

その後は、口うるさいカラス天狗を始め、遠野の淡島曰くエロ田坊の黒田坊、力なら負けない青田坊、マイペースな河童、巨乳の毛娼<sup>けじよう</sup>妓<sup>き</sup>、その他もろもろ会いに行ったのだった。

## 夜空の下で（前書き）

サイトが二周年の際にリクエストされた作品

夜空の下で

「銀時〜！銀時〜！」

「リオ？どうした」

「散歩しょ？」

彼女はそう言った。

夜空の下で

「夜なのにか？」

「夜だからだよ。というか、付き合って」

「何に？」

「巡回に」

熱心なこった、と銀時は思った。

「それはついでなんだけどね」

「ついでなのかよ」

「ついでついで」

そんなことを言った彼女は、やはり多少沖田君の影響を受けている、と銀時は思えた。

「わかあったよ」

「エヘヘ…久しぶりの二人つきりだよ」

「そうだな…」

そんなことに気づき、久しぶりのドキドキ感になる。

「銀時ありがとう」

「どうした？急に」

「うん、何でもないよ」

しばらく静寂となった。

「…リオ」

「ん？」

急に名前を呼んだ銀時に、振り向くりオ。

「お前に会えて良かったよ」

「私もだよ、銀時」

そんな会話をされていることを知っているのは、夜空に輝く星らのみであった。

非番Ⅱ 悪運（前書き）

リクエスト作品

時期

本編、第四十八訓後と第四十九訓前

## 非番Ⅱ悪運

私の非番の日は、厄日なのか？って切実に問いたい。

## 非番Ⅱ悪運

非番の日。いつも通りに、万事屋でのんびり過ごしていた。

ドコオオオオン！と万事屋が壊れるまでは。

「アッハッハッハッハッ、金時〜。遊びに来たぜよ」

「銀時だアアアアア！そして、家壊すなアアアアア！！」

「グフツ」

相手に飛び蹴りをかました銀時。

「誰？」

「あ、奴良さんは初めてですね。銀さんの知り合いの坂本辰馬さ

んですよ」

「ふうん、そうなんだ。…銀時、その辺にしたら？」

未だに、言い合い（と言っても、銀時が一方的に蹴ったり殴ったりしているだけ）している二人に声をかけた。

「リオ…」

「えと、はじめまして坂本辰馬さん。真選組一番隊副隊長、奴良リオです」

「アッハッハッハッ、よろしくじゃき」

「コイツは、頭カラな奴だから」

「アッハッハッハッ。金時、ヒドイじゃき」

「銀な、銀」

「なんか…変わった人だね」

リオは思わず言う。

「お嬢ちゃんもヒドイぜよ」

「坂本さん、陸奥さんは？」

今まで空気化となっていた新八が聞いた。

「…いや、空気化したのは、作者だろ」  
アンタ

ジャキと坂本の後ろに銃が備えられた。

「あ」

「陸奥さん」

「頭が邪魔したぜよ」

その一言を言つて、坂本を引きずりながら帰った。

「玄関…壊されたままだね…」

「そうだね…」

「なんか疲れたから帰るよ…」

「頭カラの奴を相手にしていたからなア」

「奴良さん、気をつけて」

「ありがとう、新八くん。じゃあね」

リオは万事屋を後にした。

万事屋からの帰り道。

別の意味で見慣れた衣服に気がついた。

「…あ」

今日は非番だ。最も、非番じゃなくても仕事はしたくないが。（沖田影響）

「（相手が、相手だし…）」

その人物を追うように歩む。

その人物は、人通りが少ない路地裏へ入った。

「（気づかれている…？）」

そう疑問になったが、リオも路地裏へと入った。

それと同時に、背後から気配がした。

「てめエ、あん時の犬だなア」

「やっぱりアナタね、高杉晋助」

「肝が据えている女は嫌いじゃねエ」

「それはどうも」

平然と言うリオだが、後ろから刃が備えられているのだ。

「てめエ、何者だ？」

「真選組に所属している奴良リオよ」

「はぐらかすんじゃないエ」

「はぐらかしてなんかいないわ」

高杉が聞きたいことをかわすように言うりオ。

「……………」

「妖怪、ぬらりひょん」

「妖怪イ？」

「そう。もう一人の私」

「あん時、てめエが消えたのはア……」

「妖怪の力」

正直、敵である高杉に与えて良い情報かって問われれば、答えはN  
Oのことを喋っているりオ。  
だがりオにとっては、高杉の無言の圧力によって、喋っているよう  
なものだった。

「ククク……ますます欲しくなったねエ」

「……………アンタの仲間なんてならない」

「そりゃア、そうだろうなア」

「……………」

「またなア」

「あ…」

容易く、高杉に逃げられた。

「向こうが有利だったから仕方ないよね…」

リオはこの出来事を、真選組のメンツには秘密にした。

たまには良いかも知れない（前書き）

リクエスト作品

時期は、本編ED後

『妖と夜叉』では、攘夷メンツは、実は仲良しという設定です。

たまには良いかも知れない

あなたが幸せに笑うのなら、私は気にしない

たまには良いかも知れない

「銀時ィ、来ちゃった」

「来ちゃった、じゃねエよ。堂々サボリですかコノヤロー」

「うん」

リオは即答で頷いた。

「あのさア、リオ」

「ん？」

「君さア、沖田君に似てきてない？」

「サボリ癖？」

「おう」

「大丈夫だよ、沖田隊長公認だから」

いや大丈夫じゃねーだろ、と銀時は思った。

とそこで玄関のチャイムが鳴った。それと同時に、聞こえてきた声には聞き覚えがあった。

「……………」

只今、奴良リオはサボり中だが、本来勤務中である。  
ニヤリとした表情を浮かべた。

「ふふふふ」

「（ツラ…御愁傷様）」

無言で玄関の戸を開ける銀時。

玄関に立っていたのは、指名手配犯である桂小太郎であった。

「銀時、今日はやけに早く開けて…」「か…つ…らアアアア…！」  
「…！…！」

ドオオオオンとバズーカが放たれた音がした。

「…やっぱりリオ…沖田君の影響受けすぎじゃねエか…」

ボソッと呟く銀時だった。

その直後、リオが放ったバズーカの音よりも更にデカイ音が玄関先でする。

「「！！」」

「アッハッハッハッ、またやってしもうたじゃき」

「坂本さん！？」

「おおー金時、リオ！久しぶりじゃのう！！」

「銀時だアアアア！！ボケエエエエ！！」

言いながら銀時は、坂本へ飛び蹴りをした。

「次から次と……アンタは！！」

「よオ、久しぶりだなア」

「高杉！？てめー何でここに！！？」

「わしが連れて来たぜよ」

「「「はあ！？」」」

リオと銀時、知らぬ間に復活していた桂は、揃えて聞き返す声を出した。

「坂本さんって……本当に頭カラなんですわね……普通、敵同士を鉢

合わせますか……」

「アッハッハッハッ。……泣いていい？」

「高杉…次会ったら斬るっつーたが…」

「一時休戦だ」

「いいのかア」

「万事<sup>じふ</sup>屋を血染まりしたくねエ」

「だそうよオ、幕府の犬さん」

「……別にいいわ」

不本意ながらもリオは頷いた。

「すまねえな、リオ」

「本当にだよ、銀時。もう、完全に仕事オフモードにする」

「そうか…」

リオは、仕事中和そうでない時の態度が、かなり違う。公私をしっかりと分けているのだ。

「辰馬ア、何の用？」

「皆で酒を飲むぜよ」

「それだけの為に？」

酒を皆で飲む。

その為だけに、敵同士を引き合わせたのだからしょうもない。

その後、ギヤーギヤーと騒ぐ皆。

「（たまには、こういうのも悪くないね…）」

リオは、どこか楽しげな彼らの姿を見て、そう思った。

「リオも傍に来いよ！」

「うん！」

そしてまた、リオもどこか楽しげな表情を浮かべていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8069y/>

---

妖と夜叉 番外編

2011年12月1日16時56分発行